

社会福祉法人 読売光と愛の事業団

20回記念

読売福祉文化賞



も っ と 笑 顔 を ひ ろ げ た い



2003-2022
ANNIVERSARY
REPORT

読売福祉文化賞

21世紀を迎え、支援が必要な方へのニーズはますます多様化しています。読売光と愛の事業団は、そうした時代を先取りする賞として、2003年にプルデンシャル生命とともに「読売プルデンシャル福祉文化賞」を創設しました。07年に現在の「読売福祉文化賞」となり、これまで計20回にわたって、全国から独創的で発展性のある福祉文化事業の取り組みを公募し、実績のある99の団体・個人を表彰してきました。10年には「一般部門」と「高齢者福祉部門」の2部門とし、部門ごとに各3件を選び、副賞として活動支援金100万円を贈っています。

20回という節目を迎え、これまでに受賞された団体・個人のうち、現在も活動中の中から22団体・個人の皆さんにお願いし、今取り組んでいる事業などの近況を報告してもらいました。

読売光と愛の事業団 理事長 水田邦雄

第20回を迎えて

第2回から審査員、選考委員を務める
読売新聞東京本社編集委員 保高芳昭



この賞は20年前、「福祉賞」ではなく「福祉文化賞」と銘打って誕生しました。それは、福祉に関わる方々のご苦勞に報いるだけにとどまらず、福祉の現場から新しい価値観や文化を創造する動きを見だし、応援していくことを目指したからです。

私自身は第2回から女優の栗原小巻さんとともに審査員に加わり、以来、数多くの皆さんの「福祉文化」活動を拝見してきました。毎年秋の審査会はいつも白熱した議論になります。たくさんの素晴らしい活動に対して、限られた数しか贈賞できないのがもどかしく、「受賞枠をもっと増やせないのか」と審査員が事務局にかみつ়く光景は毎年の恒例と言っていいでしょう。各回の受賞者・団体の名前を見ると、その年の審査会での熱いやりとりが思い起こされます。

これまでの受賞者・団体の皆さんはもちろん、応募いただいたすべての方々が「福祉文化の創造者」です。私は毎年、福祉現場の困難をエネルギーに変えていくクリエイティブな皆さんの姿に驚き、勇気づけられてきました。そしてこれからも、読売新聞を通じてこの思いを多くの人に伝え、共有していきたいと思ひます。

● 応募数推移

	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	
回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
一般	169	45	61	92	63	41	56	73	78	91	68	71	63	47	69	75	47	48	45	58	1360
高齢								32	32	45	42	31	30	13	41	23	28	17	18	22	374
計	169	45	61	92	63	41	56	105	110	136	110	102	93	60	110	98	75	65	63	80	1734

● 歴代審査員（敬称略・肩書は当時。10回からは選考委員）

1回	一番ヶ瀬康子	日本福祉文化学会会長 (委員長)
	石渡 博幸	厚生労働省障害福祉専門官
	河野 一郎	プルデンシャル生命副会長
	五阿弥宏安	読売新聞東京本社論説委員
2、3回	一番ヶ瀬康子	日本福祉文化学会会長 (委員長)
	石渡 博幸	厚生労働省障害福祉専門官
	河野 一郎	プルデンシャル・ファイナンシャル（3回は同生命元社長）
	栗原 小巻	女優・ユネスコスペシャルアドバイザー
4回	保高 芳昭	読売新聞東京本社論説委員
	一番ヶ瀬康子	日本福祉文化学会会長 (委員長)
	茅根 孝雄	厚生労働省障害福祉専門官
	河野 一郎	プルデンシャル生命元社長
5～7回	栗原 小巻	女優・ユネスコスペシャルアドバイザー
	茅根 孝雄	厚生労働省障害福祉専門官
	安藤 雄太	東京ボランティア・市民活動センター副所長
	馬場 清	日本福祉文化学会事務局長（7回は浦和大学准教授）
	保高 芳昭	読売新聞東京本社論説委員
8～20回	栗原 小巻	女優
	高木 憲司	厚生労働省障害福祉専門官（12回からは和洋女子大学准教授）
	安藤 雄太	東京ボランティア・市民活動センターアドバイザー
	袖井 孝子	一般社団法人シニア社会学会会長
	馬場 清	日本グッド・トイ委員会事務局長（15回からは東京おもちゃ美術館副館長、19回からは日本福祉文化学会副会長）
保高 芳昭	読売新聞東京本社論説委員（10回からは同社編集委員）	

読売福祉文化賞歴代受賞者一覧（1回～20回）

※太字は近況を報告していただいた受賞者
団体名は受賞当時の名称です

第1回（2003年度）

名取 美和さん（タイ在住）
大橋 晃太さん（東京都世田谷区）
命輝け京都第九コンサートの会（京都） P.1

第2回（2004年度）

箕輪 一美さん（横浜市）
矯風会ステップハウス（東京都新宿区）
人情集団An-Pon-Tan（三重県鈴鹿市）

第3回（2005年度）

貝谷 嘉洋さん（東京都千代田区） P.2
道村 静江さん（横浜市）
なごみの里（島根県知夫村）

第4回（2006年度）

ハート・プラスの会（大阪府寝屋川市） P.3
矢野未友木さん・百花さん（大阪市）
森 浩昭さん（広島市）

第5回（2007年度）

竹ノ内 睦子さん（東京都世田谷区）
高橋 竹夫さん（石川県加賀市） P.4
しぶし夢しづく工房（鹿児島県志布志市）

第6回（2008年度）

スマイルクラブ（千葉県柏市）
エコパートナー（鳥取県米子市）
紫会（東京都世田谷区）

第7回（2009年度）

さなぎ達（横浜市）
京都YWCA・APT（京都市） P.5
JOY倶楽部ブラザ（福岡市） P.6

第8回（2010年度）

【一般部門】
デフ・パペットシアター・ひとみ（川崎市） P.7
日本ホスピタル・クラウン協会（名古屋） P.8
エクスクラメーション・スタイル（京都府八幡市）
【高齢者部門】
わたぼうしの家（北海道釧路市）
高齢者外出介助の会（大阪市）
智頭町百人委員会 コントリビューションの会（鳥取県智頭町）

第9回（2011年度）

【一般部門】
橋田 隆明さん（千葉県流山市） P.9
ゆめ風基金（大阪市）
クーパーファッションアートグループ（沖縄県読谷村）
【高齢者部門】
生き粋あさむし（青森市） P.10
すずの会（川崎市）
住宅支援びんごNPOセンター（広島県尾道市）

第10回（2012年度）

【一般部門】
輝くなかまチャレンジド（宮城県石巻市）
ぱれっと（東京都渋谷区）
竹内 昌彦さん（岡山市）
【高齢者部門】
下宿屋バンク（横浜市）
摂津市人材サポート・ビューロー（大阪府摂津市） P.11
いけま福祉支援センター（沖縄県宮古島市）



第11回 (2013年度)

【一般部門】

CPサッカー&ライフ エスペランサ (川崎市)
SOHO未来塾 (長野県松本市)
手話エンターテインメント発信ネットワークoioi (大阪市) P.12

【高齢者部門】

よかよかネットワーク (福岡県大牟田市) P.13
高齢者・障がい者の旅をサポートする会 (東京都目黒区)
ホームレス自立支援 市川ガンバの会 (千葉県市川市)

第12回 (2014年度)

【一般部門】

エスニコ (札幌市)
モンキーマジック (東京都武蔵野市) P.14
がん心のケアの会 (名古屋)

【高齢者部門】

網地島ふるさと楽好 (宮城県石巻市)
いきいき百歳応援団 (高知市) P.15
凧北台いきいきライフを推進する会 (松江市)

第13回 (2015年度)

【一般部門】

ぷかぷか (横浜市)
ことばの道案内 (東京都北区)
「飛んでけ!車いす」の会 (札幌市) P.16

【高齢者部門】

中西ヘルスポイント実行委員会 (島根県益田市)
福祉劇団鶴亀 (宮城県柴田町)
神戸定住外国人支援センター (神戸市)

第14回 (2016年度)

【一般部門】

チャイルドファーストジャパン (神奈川県伊勢原市)
札幌いちご会 (札幌市)
シアター・アクセシビリティ・ネットワーク (東京都世田谷区) P.17

【高齢者部門】

グループゆう (仙台市) P.18
箱の浦自治会まちづくり協議会 (大阪府阪南市)
抱樸 (北九州市)

第15回 (2017年度)

【一般部門】

ふきのとう文庫 (札幌市)
せいかつをゆたかに実行委員会 (大阪府堺市)
ホスピタル・ブレイ協会 (静岡市)

【高齢者部門】

あびこ・シニア・ライフ・ネット (千葉県我孫子市)
フラワー・サイコロジ協会 (京都市) P.19
在宅介護を支える家族の会 (山形県村山市)

第16回 (2018年度)

【一般部門】

柿島 光晴さん (東京都町田市) P.20
障害者スキー普及講習会実行委員会 (神奈川県厚木市)
大阪精神医療人権センター (大阪市)

【高齢者部門】

くしろ高齢者劇団 (北海道釧路市) P.21
アテラーノ旭 (高知市)
りぷりんと・ネットワーク (東京都千代田区)

第17回 (2019年度)

【一般部門】

Being ALIVE Japan (東京都世田谷区)
楽の会リーラ (東京都豊島区) P.22
そらいろプロジェクト京都 (京都市)

【高齢者部門】

みんなのピアノを贈る会 (水戸市)
新田の風 (長野県上田市)
外国人高齢者と介護の橋渡しプロジェクトチーム (名古屋)

第18回 (2020年度)

【一般部門】

Fine (東京都江東区)
愛実の会 人形劇団紙風船 (名古屋)
プール・ボランティア (大阪市)

【高齢者部門】

じゅんちゃん一座 (青森県十和田市)
居場所創造プロジェクト (岩手県大船渡市)
平戸平和台地区地域運営協議会 (横浜市)

第19回 (2021年度)

【一般部門】

ア・ドリーム ア・デイ IN TOKYO (東京都品川区)
ホットライン信州 (長野県松本市)
日本卓球バレー連盟 (京都市)

【高齢者部門】

ソシオキュアアンドケアサポート (東京都大田区)
コーチズ (広島市)
ろう高齢者の豊かな生活を支える会 陽だまり (北九州市)

第20回 (2022年度)

【一般部門】

シブヤフォント (東京都渋谷区)
響愛学園パラ・アーティスト・マネージメント協会 (愛知県一宮市)
タンデム自転車NONちゃん倶楽部 (松山市)

【高齢者部門】

SET (岩手県陸前高田市)
たすけあいの会ふれあいネットまつど (千葉県松戸市)
U P T R E E (東京都小金井市)

※表紙の写真は、左から第20回の授賞者の皆様、NONちゃん倶楽部、SETの活動

第1回 2003年度

「障害者と共に歌う合唱団」

命輝け京都第九コンサートの会

(京都市)

「受賞は大きな励みです。ハンデの有無を超え、ともに第九を歌う喜びをもっと広めていきたい」。障害のある人もない人も同じ舞台上立ち、ベートーベンの交響曲第九番を合唱する「命輝け京都第九コンサート」代表、馬庭京子さん(67)が喜びを語る。

む約三百五十人が団員に。小学生から八十歳代のお年寄りまでと年齢層も幅広く、ソプラノ、アルト、テノール、バスに加え、発声が困難な団員のため音域を狭くとした「第五パート」を設けた。

練習会場への送迎が必要な人は他の団員がサポート。視覚障がい人が懸命に歌う姿に圧倒される。また、団員の佐久間由佳

ハンデ超え響き合う歌声

障害者を支援するボランティアとして活動し、市民合唱団で歌っていた馬庭さんは一九九〇年、東京で障害者が歌う第九を聞き、その表情の輝きに感激。「ぜひ京都でも実現を」と合唱の指導者を迎え、九二年に実行委員会を発足させた。

障害者には、指揮に合わせて、隣の団員が手を握って歌い出しなどを知らせ、聴覚障害者は手話や身ぶりで歌詞を表現する。一年半練習して九三年、初のコンサートを京都府八幡市で開いた。ホールいっぱい響いたハ

ーモニ。演奏が終わった時、団員にも聴衆の目にも涙が光っていた。

十一月に六回目のコンサートを京都市で開き、四百三十人が舞台上立つ。馬庭さんは「活動にはちょっとした心遣いが必要。そのノウハウを全国に伝えたい」と意気込み。

2004.4.2付 読売新聞朝刊特集面

近況

楽聖思い 気持ち奮い立たせる 200人集まり、待望の演奏会

2018年の第13回命輝け京都第九コンサートは約450人の大合唱団の参加のもと、共生する社会を具現化するためにハンディのある人もない人も入り混じって歌い、大成功を取めることができました。しかし、コロナ禍のために2020年に開催予定だった第14回は中止になってしまいました。約3年間、活動ができませんでしたが、ベートーベンが聴力を失いながらも楽譜に向かい第九を書きあげたことを思い出し、弱気になる気持ちを奮い立たせることができました。第15回に向け、団員から「歌いたい」「会いたい」という声上がり、2023年1月15日に200人が集まり、「いのちの集い」という演奏会を京都市内で開催しました。第九の合唱指導もあり、久しぶりに熱い気持ちがよみがえりました。終演後は「こんな演奏会にまた参加したい」という大きな温かい拍手に包まれました。大合唱団で早く歌える日が来るのを楽しみに活動を継続する所存です。(理事長 久馬正義)



会場に掲げたベートーベンの垂れ幕
(2023年1月15日、「いのちの集い」で)

2005.12.14付 読売新聞朝刊特集面

▶ ジョイスティックを操作して車を運転する貝谷さん



NPO法人日本バリアフリー協会代表
貝谷 嘉洋さん (35) 東京都千代田区

電動車イスに乗ったまま車に乗り込む。片手で操作レバー(ジョイスティック)を動かすと、車体がゆっくり動き出した。前後に傾けると「ブレーキとアクセル、左右に動かすとハンドルが切れ、カープも滑らかに曲がる。

これが重度身体障害者のために改造された「ジョイスティック車」。レバーの横にある6個のボタンを組み合わせて、サイドブレーキをかけたたり、窓を開閉したり、ギアを切り替えたりもできる。

「安全運転には気を付けていますよ。僕が事故を起こしたら、紹介できなくなるから」。障害者のため、この車

を講演で紹介したり、中学生の授業などで実際にジョイスティックなどに触れてもらったりして、多くの人が知っている。自ら代表を務めるNPO法人「日本バリアフリー協会」

の取り組みの一つだ。10歳で筋ジストロフィーと診断された。筋力が少しずつ弱くなる病気で、14歳のときから車イスの生活。指も足先は多少の自由はきくが、握力は両手とも数センチ。日常生活

重度障害者に 車運転免許を

活の多くの場面で介助者の支えが必要だ。

重度の障害者でも車の運転ができることを知ったのは、22歳で単身で米国に渡り、カリフォルニア大学ゴールドマン公共政策大学院に留学していたときだった。

免許取得は10代ですでにあきらめていたが、米国では同じ障害を持つ人たちがとって車を操るのは特別なことではなかった。

そんな彼らに感化され、ジョイスティック車の操作を習い、世界が広がった。財団の助成や企業の協賛も得て、ワゴン車を約150万円かけ改造。2000年には介助者らとともに、バークレーからニューオーリンズ、マイアミ、シカゴなどを54日かけて米国内一周も果たした。

今は、自分と同じ重度障害者のために、免許取得までの支援を続ける。公的な支援が充実している米国に比べ、日本では、改造費などのハードルの高さが理由で一般的には普及がまだだ。貝谷さんは「行政が関心を持って欲しい。障害があってもできることは多い。支援や力を借りなければならぬことがあっても、社会参加して貢献したいと思っている」と話す。

近況

障がい者車移動 未だ長い道のり 今は音楽イベント開催に傾注

受賞後も、都内だけではなく北は宮城、南は大分まで毎年、地方に出かけ、ジョイスティック車の試乗会やワークショップを行ってきました。その後、2015年に故障のため、泣く泣く廃車にしました。障がい当事者をはじめ関係者の啓発にはつながり、国産車の開発や並行輸入によってジョイスティック車を運転する人が増えましたが、社会全体として普及するということまでは至っていません。我が国の車による障がい者の移動については、先進諸国の中でも特に遅れており、今後も啓発活動が続けていく必要性を感じます。

私自身の活動は、その後、障がい者の国際舞台芸術コンクール「ゴールドコンサート」の主催にシフトしました。これは、社会参加の重要性を啓発するために、毎年1回、障がいを持つ音楽家やダンサー10組が東京国際フォーラムに集まり最高賞を目指す、千名規模の音楽イベントです。

(NPO法人日本バリアフリー協会代表理事 貝谷嘉洋)



「第18回ゴールドコンサート決勝大会」実行委員長として舞台挨拶する貝谷さん

ハート・プラスの会 〓名古屋市

内部障害者の啓発活動

体の内部を意味するハートマークに、思いやりの心をプラスした「ハート・プラスマーク」〓

を作り、2003年11月から「内部障害者」の認知度向上に取り組んでいる。

心臓や腎臓、腸などの



内部障害者の深い理解

の臓器に疾患や機能障害を抱える内部障害者は、身体障害者全体の25%、100万人以上といわれる。しかし、外見上は健常者とほとんど変わらないため、一般に認知されにくく、思わぬ誤解を招くことさえある。

スーパーや病院の障害者用駐車場に車を止めると、「自分で歩ける人は一般駐車場を利用してほしい」と注意を受ける。電車やバスなどの優先席に座れば、周囲から冷たい視線を浴びせられる。周囲の人たちには悪気がないだけに、自分が障害者だということを理解してもらえないことが、一層もどかしい。

「だるい、つらい」という感覚は、見た目では判断しにくく、本人にしかわからない」と話すのは、3人いる会の代表の1人、白井伸夜さん(37)〓埼玉県〓だ。白井さんは生まれつき心臓に

見た目は同じでも……

障害を持ち、他の2人、清水克俊さん(38)〓岡山県〓と村主正枝さん(32)〓東京都〓も腸や肺などに疾患を抱えている。

体調面での制約が大きいため、会の活動はインターネット上の広報活動などが中心だ。名古屋市に事務局を置き、ホームページからマークやチラシをダウンロード出来るようにする一方、国や自治体などに陳情し、施策への反映を訴える。

会員は約670人。疾患の部位や障害の度合いが異なる者同士が、共通の悩みを解決するために協力しあう組織が出来た意味は大きく、昨年開催された「愛・地球博」(愛知万博)会場内のケアセンターや、愛知県尾張旭市の障害者用駐車場にハート・プラスマークが掲げられたりするなど、成果が表れ始めている。

ただ、一般への浸透はまだ十分とは言えず、マークを知らない人も多い。就職や恋愛などに際して、自分が内部障害者だと言いつけない人もいる。

医療の発達で、以前であれば助からなかったような疾患や障害を抱えた人が永らえるケースも増え、内部障害者は今後さらに増えるものと予想される。「受賞を励みに、ハート・プラスマークが、車いすをデザインした障害者マークと同じような認知度を持つ日が来るまで、粘り強く活動を続けていきたい」と村主さんは話している。

2006.12.18付 読売新聞朝刊特集面

近況

「内部障害」の認知度高まる DVD作成し小学生にもPR

受賞の翌年(2007年)にNPO法人として登録し、本格的な活動を始めました。内部障害者であることを示すハート・プラスマークの普及に努めています。当初、名古屋市にあった事務局を2017年に大阪府寝屋川市に移転しました。

当マークは、内閣府のホームページでも福祉に関わるマークの一つとして紹介され、全国の多くの自治体のホームページにも掲載されるようになりました。最近、障害者用駐車場でも掲げられるケースが目立っています。佐賀県から始まったパーキングパーミット制度(駐車場利用証制度)では、利用証のデザインに当マークを採用する府県が増加。公共交通機関でも、優先座席には内部障害を表わすマークデザインが加わり、「内部障害」という言葉の認知度も上がっているようです。

さらに、「内部障害」への理解を広げるため、新たに小学校高学年向けのDVDを製作。学校教育の場で使っていただけるよう活動を開始したところです。(代表理事 鈴木英司)



「内部障害」への理解を広げるため製作した小学校高学年向けのDVD

心の病に「駆け込み寺」

自立更生施設を運営

高橋 竹夫さん 69

石川・加賀市

「人は誰もが必要とされて生まれてきて、愛し、愛される存在」という信念を持ち、心を病んだ人や障害を持つ人の社会復帰を手助けする自立更生施設「福寿草の郷」を運営している。

「行き場のない人をなんと

か救いたい」と思い立ち、高橋竹夫さんが、最初に「駆け込み寺」を開いたのは出生地の高知県だった。その後、札幌行脚で全国を歩いて気に入った北陸に拠点を移す。加賀に腰を落ち着けてからは30年になり、山中に手作りで生活寮や授産施設を少しずつ整えてきた。

軽度の知的障害者や非行、引きこもり経験者、身よりのない人など、やって来る人の事情は様々。共同生活を送りながら、漆器の梱包作業や炭焼きなどの作業をし、仕事の楽しさや厳しさを体感する。みんなで作業することで、悩みを分かち合い、多くの価値観があることを知る。全国から助けを求めて集まる人たちは、自然豊かな環境で規則正

しい生活を送り、徐々に健全な心を取り戻す。

心を開く作業は容易ではない。1年未満で社会へと戻る人もいる。「じわじわと、でんでん虫のまじに進み、焦らないことが大事」。ある少女は、何を聞いてもにらみつけるばかりだった。「話したくないなら、ここに書いて」とメモ帳を渡した。猛然と書き出し、顔に投げつけるように返してきた。「字が読めないから教えて」と言った。「こんな字も知らんで先生か」というどなり声が、初めて聞く少女の声だった。高橋さんに感情をぶつけ、少女は心を開くきっかけをつかんだ。

これまで相談者を始めて、かわったのは3万人以上。

「福寿草の郷」から羽ばたいた人の生活が気に掛かる。「結婚したよ」「就職をしたみたい」「いまは見違えるようになった」と聞くに安心し、活動をやってきてよかったと感じる。

四国霊場八十八か所を回るお遍路さんを泊める宿が実家だった。祖母は遍路客に金がなければ無料で泊め、出かける時にはお弁当を持たせた。「事情がある人もおるんや」と話し、困っている人、弱い人々に寄り添う祖母の姿を見て、「いつか自分も人を助けたい」という心が芽生えた。

これまでは活動への理解が得られず、周囲から白い目を向けられたこともあった。それだけに、「長い長いトンネルの中歩んできたが、光が当たってうれしい」と喜ぶ。今回の受賞を励みに、これまで運営費に余裕がないために受け入れられなかった人にも手を差し伸べたいと思っている。

2007.12.17付 読売新聞朝刊特集面

近況

ひとりひとりに向き合うやり方変わらず 支援したひとが支援してくれるように

福祉文化賞をいただいた直後、たくさんの問い合わせがあり、世の中には、こんなに困っておられる方がまだまだおられるのだと、改めて気づかされました。

ひとりひとりと向き合い、何を悩んでいるのかひとつひとつ解きほぐしていくやり方は、今も変わりません。

また、相談に来た子が数年後、元気な顔をして遊びに来てくれた時、「こんな私でも人様のお役に立てたのかな」と心の中があたたかくなります。

近年はコロナ禍により、大きな活動は出来ませんでしたが、「かけこみ寺」の門だけは閉じることなく、今日に至りました。

私はこれまで「支援する側」で活動してきましたが、今日では、過去に支援させていただいた人達が、支援する役割を担ってくださっております。福祉の輪が引き継がれていく様をこの目で見ることが出来ました。これまで出逢った多くのご縁に心から感謝しております。（高橋竹夫）



コロナの終息を願って万羽鶴を折った作業所の皆さん。左端が高橋さん

専用電話を設置した机と資料などが並ぶ約10平方メートルの事務所。「京都YWCA・APT」は毎週月曜、木曜日の午後、元教師やシスター、主婦らボランティアの相談員約10人が交代で、在日外国人からの電話相談を受けている。交わされる言葉は日本語、英語、中国語、フィリピンのタガログ語、タイ語など。寄せられる内容も、労働問題や在留資格、医療、子どもの教育など多岐にわたる。

APTは「アジアンピープル トウゲザー」の略。言葉の壁に悩み、孤立しがちな外国人を助けることも、日本社会の偏見や先入観をなくそうと、1991年9月に結成された。2008年度の相談件数は前年度より24件多い96件。年々増加傾向にある。安藤いづみ代表(54)は「不況による労働環境悪化で、夫婦関係にひびが入るなど、問題が複雑化している。相談員の知識やスキルアップも求められる」と話す。

電話相談だけでなく、家庭訪問や行政機関との連携が必要なケースも少なく

京都YWCA・APT

(京都市上京区)



寄せられた相談の対応を協議するAPTのメンバーたち

在日外国人に寄り添う

ない。日本人男性と結婚し、2人の子どもがいるフィリピン女性から、「夫から暴力を受けているが、在留資格の更新には夫の協力が必要」との相談が寄せられた。暴力は長期間続いていたため、相談員は保護命令申請書を作成し、婦人相談所に連絡。母子は夫から逃れて母子寮での生活を始めることができた。

こうした深刻な家庭内暴力では、相談員も危害が加えられる恐れがある。このため、相談員は本名と別の名前で活動している。10年以上活動を続ける中国出身

の女性相談員(57)は「身の危険を感じたこともあるが、相談者から『日本に来て良かった』と聞くと、充実感がある。各国で社会通念や文化に違いがあり、中国の事情がわかる立場から支えていきたい」と意気込む。

安藤代表は「日本人であれば簡単に得られる情報も、外国人では入手できないことが多い。活動をより多くの人に知ってもらい、継続していきたい」と、受賞を機に気持ちを新たにしている。

(京都総局 岡田英也)

2010.2.23付 読売新聞朝刊特集面

近況

コロナ禍でも活動継続 出身国増えて通訳依頼も

コロナ禍でも活動は継続しています。相談者の中には、仕事が減ったり、仕事を失ったりする人も出てきました。また、母子生活支援施設などでは外出を制限するため、自立に向けて働き始めることができなかつたり、子どもも不安定になったりしています。最近では、DVで夫から逃れてきた人、母国から子どもの認知と日本国籍を求めて来る人などが増え、ケースに合わせて必要な場所へ同行することが多くなりました。相談者の出身国もインドネシア、ベトナム、ネパールなどの人が増え、通訳を依頼する必要性も増えています。私たちの活動は京都市内に限らず、京都府、大阪府、滋賀県、奈良県などにも及んでいます。交通費などは相談者に請求できないので、副賞を頂いたことは活動を維持するためにありがたいことでした。複雑なケースがますます増える中、知識と相談技術をさらに高めるため、改めて私たち自身の研修に取り組み、より良い相談対応ができるよう心掛けています。

(代表 安藤いづみ)



電話相談に応じるメンバー (2022年12月26日、京都YWCA・APTで)

コンサートに向けて練習に熱が入る楽団「JOY倶楽部ミュージックアンサンブル」



JOY倶楽部プラザ（福岡市博多区）

アコーディオンやマリンバなどが奏でるメロディーが響いた。知的障害者のプロ楽団「JOY倶楽部ミュージックアンサンブル」が、コンサートに向けて練習に励む。リズムがずれたり、音を間違ったりもするが、メンバー

知的障害者プロ楽団10年

「私たちは全体でリズムをとる。声かけ合ったり、練習を終えて、キーボード担当の田中秀明さん(63)が気持ちよく汗を流した。」

「たぐさんのお客さんから拍手をもらう瞬間が一番うれい」と、本番が待ち遠しい様子だ。

社会福祉法人・福岡障害者

(西部社会部 関屋洋平)

文化事業協会が運営する福岡市博多区の「JOY倶楽部プラザ」は、全国でも珍しい音楽活動に取り組み授産施設だ。楽団のメンバーはダウン症や自閉症などの障害を持つ19〜39歳の男女27人。彼らはプロのミュージシャンとして1ヶ月3〜5万円を稼ぐ。

楽団が結成されたのは1993年。障害者を治療している歯科医の緒方克也理事長(62)がオランダで知的障害者の演奏を聴いて、「『障害者だから』ではなく、『素晴らしいから聴きたい』と言われた楽団をつくらう」と患者に呼びかけた。

楽譜が読めない一人ひとりに、スタッフが演奏してみせ、曲を覚えてもらう。うまく演奏出来ないと、自分の腕にかみついたり、泣き出したり。どうしても無理な時は、演奏しやういようにアレンジし直す。音楽指導員の小川美奈さん(35)は「強制ではなく、自発的な表現を後押しすることが大切」と話す。

年十数回の演奏会で自信をつけ、2000年4月には台湾公演を成功させた。その年にプロ宣言CDも発売した。レパートリーは、クラシックからポップス、ロックまで約60曲に増えた。プロ意識が芽生え、週5回の練習を休む人はほとんどいない。

今では年間50回のコンサートこなす。「懸命な姿に涙が出た」「自分たちにもできるんだと勇気もらった」。障害者やその家族から感動の声が寄せられる。精方理事は「地方でのコンサートを増やし、障害者への理解を広めたい」と話す。

2010.2.23付 読売新聞朝刊特集面

近況

お呼びがかかればどこへでも オンラインでコンサートも

1993年の活動開始から間もなく30年を迎え、現在メンバーは33人に増えました。「お呼びがかかればどこへでも」を合言葉に日本中、時には海外にもJOY倶楽部の音色をお届けしています。公演活動は年間50本ほどに及び、障がいのある演奏者がコンサートを通じて演奏活動をすることで社会と繋がっています。

新型コロナウイルスの影響により、コンサートを含むエンターテインメント業界は大きな打撃を受けました。私たちもコンサート活動の制限を受け、お客様の前で演奏活動は随分と減りましたが、「いつコンサートの依頼が来ても万全の態勢で取り組めるように」と事業所にあるスタジオ内での日々の練習は欠かさず毎日行ってきました。最近では、オンラインでのコンサートのほか、徐々に集客を目的としたイベントやコンサートの依頼も以前のように戻りつつあります。次の40年に向けて音色をもっともっと世界中に届けていきたいと思えます。

(JOY倶楽部副施設長 岡部秀輔)



2020年1月のニューイヤーコンサート

耳の聞こえない人も楽しめる舞台づくりに余念がないメンバー



人形を操る役者が、身ぶり手ぶりでコミュニケーションを取りながら舞台を作っていく。やがて人形が生き生きと動き出す。
NHKテレビ番組「ひよっこりひよたん島」で有名な人形劇団ひとみ座を母体にする現代人形劇センターが、国際障害者年の1980年に結

財団法人現代人形劇センター
「ゴーフ・パペットシアター・ひとみ」 (川崎市)

せりふに頼らない人形劇団

成。「せりふに頼らない人形劇をつくらう」と、聴覚にハンデのある人と健常者が共に活動するプロ劇団が誕生した。
現在の役者6人のうち、代表の善岡修さん(35)ら3人は耳が不自由。手話など様々な手法を取り入れ、だれもが楽しめる人形劇を追求する。メンバーも新聞を読んだり、映画や美術展を見たりして感性を磨く。国内外での公演に加え、ワークショップにも積極的に取り組んでいる。
今回の受賞に、善岡さんは「この喜びを皆さんに分けてあげたい」と笑顔を見せた。劇団を企画、運営する同センターの森元勝人理事長も「福祉と文化の両面で評価されたのがうれしい」と話している。
来年4月には結成30周年を記念した新作が上演される。(読売光と愛の事業団)

2010.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

障害の有無や文化の違いを越え 普遍的な人間の繋がりを発信

受賞から13年目になります。その間も、2011年に「森と夜と世界の果てへの旅」、18年に「河の童」と、ろう者と聴者の協働の可能性を追求する人形劇作品を発表し、全国各地での上演活動を続けてきました。2021年からは「高齢ろう者×アートプロジェクト」を始動。これは、高齢のろう者が歩んできた半生を当事者と芸術家チームが一丸となってアートに昇華するシリーズです。22年には、ろう者と聴者が入り混じった多彩な外部スタッフを迎え、新作「百物語」を発表。芸術性と情報保障の両立を目指した試行錯誤が、この人形劇に新鮮な表現をもたらしました。

コロナ禍によって私たちの生活は大きく変わりました。例えば、オンライン会議では話している相手と目が合いません。必要な情報は伝えられる一方、世間話の親密さには繋がりにくいようです。今まではその意味を考へもなかった生活の当たり前が、その意味を顧みられることもなく、いつの間にか失われていく。そんな気もします。翻ってみれば私たちが取り組んできたものも、そんな「不要不急」のひとつかもしれません。身体や表情や人形の動きによって伝わる何か。障害の有無や文化の違いも越えた、普遍的な人間の繋がりを、今後も人形劇で発信しつづけていきたいと思ひます。

(企画制作担当・池内剛志)



人形劇「百物語」の舞台 (2022年)

NPO法人日本ホスピタル・クラウン協会

(名古屋市)

病室に突然、派手な衣装に赤い鼻をつけた道化師(クラウン)が入ってきた。目の前で繰り広げられるパフォーマンスに、子供たちの歓声が響く。日本ホスピタル・クラウン協会は2005年設立。約40人のクラウンが全国約50の病



ウクライナの病院で、入院中の子供たちを笑わせる大棟さん(今年9月) 日本ホスピタル・クラウン協会提供

病気の子どもを励ます道化師

院を回り、長期入院の子供たちを楽しませている。自ら子供たちに手品を教え、驚く側にも回る。理事長の大棟耕介さん(41)は「人を楽しませる喜びを味わうことで、子供たちが主体的になってくれれば」と話す。

大棟さんは03年、修業で訪れた米国で、ホスピタル・クラウンに出会った。「日本でもやってみよう」。当初は安全面や衛生面で理解が得られなかったが、技術を磨き、仲間を育てることで実績を積み上げた。

4年前からは、旧ソ連のチェルノブイリ原発事故で後遺症を負った子供を訪問するなど、海外にも活動を広げている。大棟さんは「笑いが少なくなった子供たちに、わずかな時間でも病院にいることを忘れさせてあげたい」と話す。

(中部社会部 山下昌一)

2010.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

コロナ禍でもできることを意識 Clown of the yearとして表彰

協会の活動は15年を超えて確実に広がり、北海道から沖縄まで96病院を150人の協会認定クラウンが訪問をしています。日本でこの活動を文化として根付かせつつあります。また、東日本大震災、熊本地震の被災地域にも通い続けてパフォーマンスをし、心のケアをしてきたと思っています。

コロナ禍において、病院への入室制限が出た時には動画配信、オンライン・パフォーマンスなど、「今できること」を意識してきました。病室と家庭とスタジオの3か所をオンラインで結び、同じパフォーマンスを、同じタイミングで観ることにより、家族が一緒にいるような感覚を得て、さらにその時生まれたその笑顔を1枚の似顔絵にしてプレゼントする企画は、世界中に配信されました。非接触が条件でありますから、ベランダから病室内の子どもにパフォーマンスをするなど、クラウンにしかできない工夫をしています。

このような活動が評価され、2021年、世界道化師協会から世界で最も活躍した道化師「Clown of the year」として表彰されました。今後10年ほどかけ、現在の倍程度の組織になれば、全国の小児病棟にクラウンを届けることができますし、海外の病院、被災地、戦地でも効果的な活動ができると思います。(理事長 大棟耕介)



ウクライナの小児病棟を訪れ、小児がんと交流する大棟さん(2009年撮影)。22年にはこうした写真を集めた展示会も全国各地で開催。2月にはワルシャワに行き、ウクライナからの避難者にパフォーマンスを見せた



橋田 隆明さん 67
(千葉県流山市)

千葉県柏市増尾の作業場に置かれた雑多な建築廃材。これが、橋田隆明さん(67)が考案したエコ平板に欠かせない材料となる。

エコ平板は、レンガやタイル、石などの廃材を無作為に埋め込んで作るモザイク模様 of 装飾建材だ。橋田さんは型に流したモルタルに廃材を埋め込む技術で特許をとり、障害者に制作してもらった。技術習得によって工賃アップや能力開発などにつながる。プロジェクトは現在、特別支援学校など全国11か所に広がる。タイルの配置には、障害者

エコ平板づくりで障害者を支援する橋田さん

障害者手作りの建材

の感性やこだわりが前面に表れる。「端っこは青色がいいんじゃないか」「このスペースには小さい石を入れてみよう」。橋田さんのアドバイスにも自然と熱がこもる。手作りの温かみと、芸術性にも宣む製品は、全国の公園や広場、施設の床や壁面など200か所以上で使われている。

海外の技術指導にも熱心だ。地雷などで障害を負ったアフガニスタンの人や、エイズで親を亡くしたアフリカ南部レソトの子供らの自立を後押しする。

今、力を注いでいるのが東日本大震災で出た木材などがれきを再利用した装飾建材作りだ。すでに宮城県の福祉作業所などで制作が始まっており、被災した障害者の生活再建、地域復興を支える力となりそうだ。橋田さんは「障害者のパワーに多くの人の関心と理解が得られれば幸せ」と話している。

(千葉県支局 淵上隆悠)

2011.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

被災地で復興モザイク作り ウクライナ避難民の支援も

理事長を務めるNPOエコ平板防塵マスク支援協会は、東日本大震災、熊本地震の被災地14か所の福祉作業所などと連携し、復興モザイク作りを実施しました。材料には津波で流された住宅・木材・瓦礫のほか、浜辺の砂岩、大理石、玉石などを使用。障がい者も参加し、プロジェクトに取り組みました。作品は岩手県陸前高田市の奇跡の一本松記念モニュメントを含む10か所の工事に採用されています。モザイクパーツを一つ一つ埋め込む緻密さと根気をベースとしたアート実現に被災地の人たちと取り組んだ10年でした。

コロナ禍においては、作業の標準化・容易化を図り、小型の花などのモザイクパーツ制作へと舵を切りました。多数の小さなパーツを一つの大きな作品に統合するコンセプトです。東京オリンピック選手村近くの公園にはオリンピック記念モニュメントを設置。豊島区が都内で唯一、SDGs指定都市として認証されていることから、池袋サンシャイン通りにSDGsモニュメントを区内の3作業所と共同で制作しました。また、2022年10月よりウクライナ避難民を支援し、ヒマワリのモザイクを製作しています。2月末に完成する長野県上田市新庁舎屋外工事に採用が予定されています。(橋田隆明)



SDGsモニュメントの製作 (2019年9月、豊島区サンシャイン通りで)

NPO法人 活き粋あさむし (青森市)

青森市の奥座敷、浅虫温泉の駅近くにある「浅めし食堂」は、昼食時になると、地域のお年寄りが次々と訪れる。すいとんやダイコン、手羽元の煮物などを味わいながら、世間話に花を咲かせる。利用者の一人、近藤ちえさん(92)はほぼ毎日訪れる。「知り合いと話せるし、栄養もいっぱい。この食堂は本当に助かるね」とほほ笑んだ。食堂に来られない人のために弁当も配達しており、こちらも好評だ。

理事長で内科医でもある石木基夫さん(54)は、往診をしていて一人暮らしの高齢者の食生活が気になった。栄養が偏っていたり、1人だけで食事をしていたり。「栄養についての食事と交流する場所が必要だ」と2003年にオープンした。

人気メニューの日替わり定食に使う野菜のほとんどは、

地域の「食」と「農」つなぐ



地域の人たちでにぎわう浅めし食堂。高齢者の交流の場となっている

10^きほど離れた農園で栽培している。耕作放棄地を借りて再び農地によみがえらせた。食堂、農園ともビジネスと位置づけ、若者らの雇用の場も創出した。今後も地域の実情にあったサービス内容の充実を図る。

石木さんは「若者も高齢者も元気に住み続けられる地域にしていきたい。受賞は大きな励みになる」と話していた。

(青森支局 小池和樹)

2011.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

ずっと通い続けたい居場所を 高齢者施設内に移転、施設の給食も

浅めし食堂を始めて10年目で、理事長の医師が隣接地に開設した高齢者施設内に移転し、施設のお年寄りの給食も提供しています。食事の味付けが濃い青森県民は薄味の給食は美味しく感じられず、味が無いと言ってなかなか受け入れてくれませんでした。しかし、続けるうちに、味だけが問題ではなく、利用者とのコミュニケーションが取れていないと気付きました。進んで話しかけるようにしたほか、一般のお客さんと利用者が一緒に生け花体験をしたり、利用者に店の玄関に花を植えてもらったりするなど、たくさんの方に挑戦しました。すると、自然に利用者さんから「今日のご飯美味しかったよ」「懐かしい、また食べたい」と言ってくれるようになりました。90歳過ぎの方は他の方が食べた食器の下膳もしてくれ、「私の生きがいだ」と言ってくれます。「ずっと通い続けたいと思うような居場所」にしたいという思いが大事だということを教えてくれました。移転後は、真空調理という調理法を取り入れて惣菜も真空パックで販売をしています。「県外で一人暮らしの子どもに送りたい」「日持ちもする」と人気になっています。これからは惣菜セットのネット販売が出来ればと思っています。(副理事長 三国亜希子)



▲食堂で行われたクリスマス会 (2021年12月)



◀真空パックの惣菜

同世代 励まし合う弁当



おかずを盛り付ける北川さん（中央）たち

NPO法人摂津市人材サポート・ビューロー

（大阪府摂津市）

「ええ天気やな」「元氣してるか」。お年寄り宅に、昼食の手作り弁当を配達すると、自然と会話が生まれる。よそ行きの服を着て待つ人もいる。手作り弁当店「キッチン・こらぼ」は毎日、体の不自由な一人暮らしの高齢者宅約50軒を回る。配達担当の堀博三さん（76）は「『ご苦労さま』と云ってもらつと、生きていく感じがする」と喜ぶ。

高齢化社会が進むなか、お年寄りが社会貢献できる場を提供しようと、2009年9月に店をオープン。平均年齢70歳のスタッフ12人が、毎日交代で午前6時半から調理に腕を振るう。定年までホテルのシェフや食堂の調理員として勤めたスタッフもいる。代表理事の北川照子さん（75）は「弁当を作るのも、受け取るのも高齢者。同世代で励まし合えるんです」と話す。

弁当は食物繊維の多い根菜を使った煮物など野菜を中心に7品目以上のおかずを添え、「おふくろの味」を大切に作る。利用者からは「病院へ行く回数が減った」「便秘が治った」などと好評だ。スタッフも年金以外に賃金を得ることで「かみさんに何か買ってやる」と喜ぶ声は多い。

北川さんは「手に職を持った健康なお年寄りはたくさんいる。夕食も販売するなど、活躍できる場を広げていきたい」と前を見据えた。（大阪社会部 辻和洋）

2012.12.4 付 読売新聞朝刊特集面

近況

作る人も元気食べる人も元気を ホッと一息つける居場所も提供

設立当時の調理人は若い後継者に自分の培った腕と味を引き継ぐべく、「一人前になるまではやめられん」と互いに励まし合い、存分に活動してくれました。手作りから得られる独自の味を出せるようになった若者にバトンタッチをして当初のNPO事業から分離し、現在は高齢者宅の配達も含め300食を毎日作り、テイクアウト専門店も開店しました。その矢先に新型コロナウイルス感染症の波に巻き込まれ、経営面では大きな打撃を受けましたが、国の持続化給付金等を受け、ようやく次への一歩を踏み出したところです。

地域課題の一つはコミュニティーの希薄化です。そこで、人と人がつながり、誰でもいつでも集える市民交流の場「まちの縁側」と題して、「こらぼハウスそら」を設立しました。高齢者からパパ・ママ、小中学生と多世代の方々が遊びや勉強にきてホッと一息つける居場所を提供しています。趣味や健康づくり体操、指ヨガや親子ひろばなど。集まった人の笑顔の輪が小さな縁側から大きく広がるよう新たな街づくりにトライしたいです。

（代表理事 北川照子）



知らない人たちともいつの間にかママ友になれる親子ひろば（2022年11月）

手話エンターテイメント発信ネットワークoioi 大阪市

手話を交えたダンスの練習をするメンバー



健常者と聴覚障害者の約30人が、手話を交えたダンスやコントなどを披露する。2005年の設立から8年間で、出演したステージは80回を超える。

副代表の西崎隆志さん(33)が大学生の時に聴覚障害者の友人から、「サークル活動に参加したことがない」と知らされ、手話。パフォーマンスの合宿を企画。健常者と聴覚障害者が手話の歌や劇で盛り上がり、団

心のバリア 喜劇で越える

体を設立した。現在のメンバーは京阪神の大学生と社会人。大阪府東淀川区の「市立市民交流センターひがしよどがわ」で、仕事や学校帰りに練習に励む。聴覚障害者の日常を喜劇化したコントをテンポ良く演じ、大きな身ぶりで踊る。活動範囲は路上、幼稚園、特別養護老人ホームと幅広く、観客も健常者、障害者を問わない。

活動のテーマは「バリアクラッシュ」。障壁のない社会を願うだけではなく、心のバリアを積極的に壊す意気込みを表す。聴覚障害者で、代表の岡崎伸彦さん(31)は「oioiという団体名のように、おおい、おおい、と言われるくらい熱い活動を続ける。面白い表現を追い求め、社会の啓発にもつなげたい」と力を込めた。

(大阪社会部 上野将平)

2013.12.3付 読売新聞朝刊特集面

近況

コロナ禍機にオンライン手話講座 22年度はイベント150件出演へ

2016年4月に「一般社団法人手話エンターテイメント発信団oioi」として法人化し、活動拠点を大阪市北区に移しました。以前は手話を使ったコントや歌などのパフォーマンスが中心でしたが、手話や耳がきこえない人のことについて学べるワークショップや講演も開始いたしました。エンタメ集団ならではの「楽しい講座」として、小学校から大学、専門学校、一般企業、地域の人権講座など、様々な所で好評をいただいております。

また、コロナ禍をきっかけにオンライン手話講座を開講し、北海道から沖縄まで全国各地の方々に手話の楽しさをお届けできるようになりました。他にも、ダンサーや歌手、演奏者らとのコラボによる手話パフォーマンス、オリジナル手話体操づくり、きこえない人に関する啓発本の出版、短編映画の制作など、あらゆる角度から手話普及活動に力を注いできました。おかげさまで22年度は150件のイベント出演を予定しており、少しずつ手話やきこえない人の存在を身近に感じてくださる方が増えているのを実感しています。今後も引き続き、エンターテイメントの力で社会の関心を高め、バリアクラッシュの実現を目指します。

(代表理事 岡崎伸彦)



手話によるコントを上演 (2022年11月20日、奈良県生駒市で)

よかよかネットワーク

福岡県大牟田市

毎週月曜の夕方、大牟田市小浜町の団地集会所前に移動販売車「よらんカー」が到着すると、高齢の住民が次々と集まってくる。「今日はいいいミカンがあるんです」。ネットワークで移動販売事業をほとんど一人で担当している代表理事の小宮田鶴子さん(65)は車から商品を運び出しながら声をかける。野菜、総菜、菓子、漬けもの……。品定めするお年



移動販売車「よらんカー」から商品を運び出すメンバー

「買い物難民」へ移動販売

寄りには皆楽しそうだ。「甘酒もあるね」「このおかず、おいしかった。また買おう」。会話が弾む。同市の高齢化率は31・6%(10月1日現在)。郊外型大型店の進出で住宅街の食料品店が激減した一方、自分で車を運転しなくなった人も多いため、「買い物難民」が増えている。スーパーが撤退した地域などを回る移動販売事業を小宮さんらが始めたのは2011年9月。現在は福祉施設や公民館など15か所を週1回訪ねている。買い物を通じて近所同士が顔を合わせ、おしゃべりを楽しんでる様子を見ると、疲れも吹っ飛ばさうという小宮さん。「受賞で自信が深まった。今後は若手の販売スタッフも育て、全市に訪問先を広げたい」と意気込んでいます。(久留米支局 小川紀之)

2013.12.3付 読売新聞朝刊特集面

近況

「よらんカーが来るから話ができる」 高齢化進み移動販売の必要性増加

移動販売の訪問先も徐々に増えて18か所ほどになると、商品の確保や補充・準備にかなり手間がかかるようになりました。当然ながら訪問先ごとに売れ筋商品があります。〇〇地域は野菜をたっぷりとか、△△施設は総菜の他に日用品を忘れないようにとか。予想が的中する楽しみがあり、期待外れで残ってしまった総菜の多さに難渋することもある日々です。

そんな中、コロナの拡大で施設への訪問は次々に中止となり、今も半減したままですが、スタッフの協力などで人件費の削減と黒字化を図っています。対面販売はできませんが、入居の方から注文を聞き、ファクスして下さる高齢者施設があります。書かれているのは歯ブラシ、ティッシュ、パッドなどの実に様々な生活用品や食品です。各人の暮らしに必要な品々が何かを考えると疎かにはできません。また「よらんカーが来るから近所の人と話ができる」とマスク姿で早々と買い物に来られる地域の方々も私達の励みです。

いただいた副賞は主に「よらんカー」の車検・メンテナンス等に使ってきました。高齢者率約38%の当市では移動販売の必要性は増すばかりです。この活動がもっと広がることを願っています。(代表理事 小宮田鶴子)



個人宅の車庫を借りて開く移動販売。合図のメロディーに近所の方々が野菜や総菜などを購入に訪れる

NPO モンキーマジック

東京都武蔵野市

掛け声を聞きながら、クライミングする視覚障害者



代表の小林幸一郎さん(46)は、28歳で目の病気を患い、徐々に視力を失いながらもクライミングを続けた。障害者の世界大会での優勝経験もある。「自分の経験を生かし、多くの視覚障害者にクライミングの楽しさを伝えたい」と、視覚障害者向けのクライミングスクールなどを始め、2005年にはNPO法人を設立した。

12年4月からは東京・高

視覚障害でもクライミング

田馬場の人工壁で月1回月曜夜に「マンデーマジック」というイベントを開催している。障害者が健常者と組んで、ホールドと呼ばれる突起を使って登る。「12時、近め、サイド(横から)」とホールドの方向や距離、形を知らせてもらい、登り方は障害者が自ら考える。ロコミで広がり、毎回45人の定員は満員に。参加者は学生から50歳代までと幅広い。毎回参加する全員の志賀信明さん(55)(埼玉県入間市)は「壁を登るという目標に向かい、一緒になって楽しめるのが魅力」と打ち明ける。

土曜夜の「サタデーマジック」も今年6月から茨城県つくば市で始めた。小林さんは「一緒に遊べば、自然に理解し合える。つなごりの輪が広がっていくのがうれしい」と話している。

(東京社会部 伊藤甲治郎)

2014.12.7付 読売新聞朝刊特集面

近況

コロナ禍で開催中止相次ぐ 22年から新たにイベント追加

私達は「障害者クライミング普及活動を通じて、多様性を認め合えるユニバーサルな社会を実現し、より成熟した豊かな社会を創ります」をビジョンに、全国で活動を継続しています。クライミングは、競い合わず、誰もが同じ場所、同じルール、同じ仲間と一緒に楽しむことができ、多様性理解、共生社会の促進の機会にもなります。私達はこの特性を活かし、2012年から障害者など多様な人が交流を図ることを目的としたイベントを毎月東京で開催。14年からはこのイベントを、札幌を手始めに函館、富山、甲府、横浜、名古屋、大阪、松江、徳島、高知、岡山、広島、福岡、熊本の各地で立ち上げ、発展支援を行ってきました。

しかし、コロナ禍で開催中止が続いた影響は大変に大きく、再開を試みても参加者のみならず、運営スタッフ離れも顕著で、以前の状況に戻すことに苦慮しています。しかしながら、22年からは新たに仙台、浜松、京都、鳥取、北九州、宮崎でのイベントを立ち上げました。今後、既存地域の支援と並行して続け、全ての都道府県で交流型クライミングイベントを行い、多様性理解の促進と共生社会の実現を届けられるよう、辛抱強く前に進んでまいります。(代表理事 小林幸一郎)



クライミング体験が初めての参加者に、ルールから楽しみ方までを教える講習会

NPO いきいき百歳応援団

高知市

重りを付け、腕の曲げ伸ばし運動をする参加者



高知市の高知大神宮に11月中旬、32人が集まった。うち80歳以上が26人だ。体力に合わせて220gの重りを数個、腕や足に巻き、腕を曲げ伸ばしたり、いすを支えに立って足を上げた。準備・整理体操を含め40分かけて体を動かした。101歳で、8年間参加している東條松枝さんは「皆に会うのが楽しみだし、来るのが習慣になっている。体が動くうちは頑張らない」と

楽しく体操 健康維持

と」と背筋を伸ばした。介護予防を目的に、同市で2002年に始まった「いきいき百歳体操」。今では市内315か所で参加者は約7000人、全国では1500か所に広がった。週に1、2回、おしゃべりを楽しみながら体操をする。連絡なしに欠席した人を心配した仲間が、家で倒れているのを見つけ、命が助かったこともある。高齢者を見守る役割も果たす。活動の活性化と継続を目的に、11年に設立されたのが応援団だ。会場ごとに異なる活動ぶりや元気な人を紹介する「いきいき百歳新聞」を年3回、1万3000部、第5号まで発行した。理事の池田千鳥さん(74)は「休まずに来る人も多い。活動が広がって、みんな笑顔で楽しんで健康を維持できれば」と話した。(高知支局 山田絵里子)

2014.12.7付 読売新聞朝刊特集面

近況

コロナ感染増のたびに体操中止 百歳新聞の定期発行などに活路

百歳体操の普及と継続を目標に活動しています。多くは体操会場のお世話役支援ですが、事業として百歳新聞を発行しています。受賞を機に新聞は定期発行ができるようになりました。記事は元気な体操会場や超高齢お元気さんの紹介、健康情報や応援団活動の報告などです。取材から校正まで印刷以外は団員の手作りです。お世話役からは「他の会場の様子がわかり、参考になる」、「新聞に載ると会場が元気になる」などの声が寄せられます。ただ、コロナ感染拡大で体操を取り巻く状況は激変しました。感染者が増えるたびに高知市の要請で体操は休止。会場や体操参加者が減少し、閉じこもりや虚弱高齢者が増加しています。応援団の活動も新聞発行だけになっています。コロナ禍で協力の得られる体操会場を探して取材して載せているほか、地域包括支援センターの紹介や介護保険以外のサービスを集めた記事も好評で改めて新聞の役割を認識しました。取材した参加者やお世話役は実に元気です。住民力による百歳体操は高知のお宝。元気な会場や支援者を巻き込めば体操継続の鍵はきっと見つかると思っています。(理事長 細川芙美)



コロナ禍でも頑張っている体操会場を紹介した百歳新聞第21号

NPO法人「飛んでけ!車いす」の会 札幌市中央区

車いすを整備するスタッフ



中古の車いすを新品同様に整備し、旅行者などの手荷物として発展途上国の障害者に届けるボランティアを続けている。設立から17年で、届け先はアジアやアフリカなどの79か国、台数は約2500台にも上る。1997年、現事務局長の吉田三千代さん(66)はパングラデシュのスラム街を訪れ、車いすがなく遠出が出来ない障害者が大勢いると知った。一方、日本では中古の車いすが余っていた。手荷物として飛行機に持ち込めば無料で運べると

中古車いす79か国へ

知り、98年に会を設立した。車いすは、壊れたり病いやけがが治って不用となったりしたものや病院や老人ホームなどから収集。車いすを求める人の写真などを参考に、体に合うものを選んで整備する。整備や事務のスタッフ、資金を援助する会員など約250人が活動を支える。整備スタッフの春日佳和さん(75)は「安心して使ってもらいたい一心で直した車いすの活躍はこの上なくうれしい」と話す。

吉田さんは「家族と一緒に食事できたり、庭に出られるようになったりと、喜びの声を聞く度にうれしい。運ぶだけではなく、壊れても使えるように整備方法も伝えていきたい」と意欲をみせている。
(北海道支社 松田拓也)

2015.12.7付 読売新聞朝刊特集面

近況

アジアの国々で「車いす整備」 国内で「車いすの学校」

受賞から7年。当時はできなかった「車いす整備」の活動をJICA草の根などを利用して、インドネシア、カンボジア、ネパールで行って来ました。

車いすは定期的な整備や修理により、安心・安全に使うことができます。また、使用者にとっては「足」なので、壊れた場合には大変です。当会のベテラン整備者が現地に行き、ワークショップを数回開きました。ワークショップ後も、現地の人々が、仲間に整備技術を教えられるかも確認してきました。

国内では「車いすの学校」と題して、一般の方、学生さんなどに車いす整備のイロハを教えることを月2回行っています。

もともと旅行者に託して飛行機で運ぶ形ですが、コロナ渦中は、3つの会社が善意でコンテナに車いすを入れて運んでくださいました。車いすを使う方の体形に合わせて、「あなたへの車いす」という主旨は変えずに届けることができました。今、少しずつ旅行者が戻ってきています。来年で25年となる活動ですが、3200台もの車いすが世界81か国に届いています。また、戦禍に苦しむウクライナにも他の団体と協力して、3月末までに車いす500台を発送する予定です。
(代表理事 吉田三千代)



海外での車いす整備の活動

NPO シアター・アクセシビリティ・ネットワーク —— 東京都世田谷区



手話でスタッフと打ち合わせをする廣川さん（左）

聴覚、視覚障害者のための観劇支援団体として、舞台の字幕制作や受け付け対応をサポートし、手話通訳や字幕の勉強会を通じて支援方法の研究も行う。実働スタッフは約20人。聴覚障害のある理事長の廣川麻子さん(49)は「観劇をサポートする」という考え方を国内に広めたい」と語る。

観劇 手話で楽しむ

小学生から演劇に親しんだ廣川さんは、大学4年の1994年に「日本ろう者劇団」に入団。2009年からは約1年間、ロンドン

の障害者劇団を拠点に研修し、有名ミュージカルなど60本以上を観劇した。手話通訳や字幕が充実し、同時進行で楽しめたことに感激した。

一方で、日本では字幕などの支援は乏しく、台本の貸し出しを断られることもあった。廣川さんは「日本の観劇環境の貧しさを思い知った」と振り返る。帰国後、障害があっても観劇が楽しめる環境を整えるため12年12月に任意団体として発足させ、翌年にNPO法人に。字幕や台本の貸し出しのサポートがある公演情報を集めたウェブサイトを開設。劇団などにも観劇支援を呼びかける。

廣川さんは「誰もが演劇を楽しみ、豊かな文化生活を送れるようにしたい」と夢を描いている。

（東京社会部 大原圭一）

2016.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

副賞で劇団四季の観劇支援 多言語字幕サービス実現へ

2013年実施の聴覚障害者の観劇意識調査では、観劇サポートが充実すれば観劇希望のトップに劇団四季が挙げられていました。どうにかして実現できないものか模索していたところ、TA-net（シアター・アクセシビリティ・ネットワーク）会員から第23回全国中途失聴者・難聴者福祉大会で観劇サポート付きで企画したいという相談を受けました。読売福祉文化賞の副賞について私達らしい使い道はないかと考えていたので、この企画でポータブル字幕及びヒアリンググループのレンタル費用を賄い、参加者にはチケット代のみで楽しんでいただきました。この時の参加申し込みが150席に対し318人。予約開始から1時間足らずで受け付けを締め切るという実績を残せたことで、翌2018年2月にスタートした劇団四季公演での多言語字幕サービス実現への足掛かりとなったものと確信しています。おかげさまで設立10周年を迎えた今、TA-netは「舞台手話通訳」に重点的に取り組んでいます。全国各地で舞台手話通訳・字幕付き演劇が上演され、TA-netの合言葉である「みんなで一緒に舞台を楽しもう！」が実現する日まで引き続きご関心をお寄せいただき、ご支援ご協力いただけますと幸いです。（事務局長 石川絵理）



観劇者に手話と文字でポータブル字幕の使い方の説明をするメンバー（第23回全国中途失聴者・難聴者福祉大会で）

NPO グループゆう

仙台市泉区



ザロンの紅茶教室に参加し、談笑する利用者ら

40歳代の主婦ら十数人による配食サービスから出発し、今では高齢者の在宅介護や障害児の放課後デイサービスなどの幅広い活動に職員とボランティア総勢約80人が携わる。利用者は200人前後に上る。

食の安全を考える地域の市民グループが前身。1995年に任意団体を設立し、高齢者に弁当を1日1食運ぶうちに、「布団が干せない」「電球が交換できない」など、日常の悩みを聞

家事や介助 助け合い

くようになった。登録制の家事援助を始めると、配食サービス以外では人と話す機会がないとこぼす利用者の話から、交流の場としてサロンを開いた。障害児の母親からは「片時も我が子から目を離せない」との悩みも寄せられ、放課後のデイサービスや自立を手助けする就労支援も導入した。

既存の制度で対応できない場合は助け合い活動などで補う。地域のシニア世代や子育て中の主婦、学生などがボランティアとして、料理の腕を振るう「ワンデイスィーフ」や、健康マージャンの指導などをやる。

「誰かのために」が「将来の自分のため」になると思い、皆が参加してくれている。この循環を次の世代にも渡したい」。代表理事の中村祥子さん(67)は力を込める。(東北総局 田辺里咲)

2016.12.6付 読売新聞朝刊特集面

近況

自閉症スペクトラム児者支援に力点 要望高かった短期入所もスタート

設立以来、活動が社会的課題の解決に貢献しているだろうかという不安がありました。読売福祉文化賞の贈呈式で、「住民参加で困難にある人を支える活動を継続し、地域文化の醸成に寄与した」という言葉をいただき、市民活動の根っこが評価された喜びと、このまま継続していいのだという勇気を得て皆で喜びあったことを思い出します。使途が法人に任されていた副賞は、職員の研修と環境整備、就労継続B型事業所の商品開発などに使わせていただきました。その後、社会的に支援が不足していた自閉症スペクトラム児・者の支援に力を入れ、幼児期から高齢期までを一貫して支援できる道筋がようやく見えてきました。

しかし、新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、20年かかって地域に認知され、今後も期待されていた地域交流サロンと食堂を閉めざるを得なかったことは辛い決断でした。そんな中で2022年、次世代リーダーを中心に未来目標を作成しました。目指すは「選ばれる支援」「働きたくなる職場」「応援したくなる法人」です。11月には長年要望の高かった「短期入所」を始めました。家族介護の軽減と本人の自立の一步に役立ちたいと思います。これからも多くの人と協働して夢を形にする取り組みを続けていきます。(代表理事 中村祥子)



短期入所の方の食事風景。マイブーム「のつけ丼」

フラワー・サイコロジー協会

京都市右京区



完成した生け花を
高齢者と鑑賞する
浜崎さん（右）ら

生け花を認知症ケアなどに生かす「いけばな療法」を発案し、その普及と研究に取り組んでいる。花の香りや色彩によって五感を刺激したり、様々な花を組み合わせて個性を表現したりする生け花には、脳を活性化し、認知症の周辺症状を和らげる効果があるという。いけばな療法では、▽複数の花から好きなものを選ぶ▽花の名前や旬の季節を当てる▽完成作品を互いに褒め合う―など「コミュニケーション」を重視した要素

生け花で認知症ケア

を盛り込み、患者が能動的に参加できるようにして効果を高める工夫を凝らしている。

理事長を務める浜崎英子さん(52)が2009年に設立。京都市内を中心に十数か所の高齢者施設を訪問し、延べ約2万5000人の認知症患者らに体験してもらってきた。いけばな療法を行うことができる「フラワー・サイコジスト」の資格認定も実施。華道と心理学の基礎知識を学ぶ講座を受けた10人が取得しており、浜崎さんとともに活動している。

臨床データの蓄積といった研究にも取り組み、来年度をめどに学会の設立も目指す。浜崎さんは「性別や年齢を問わず、多くの人が実感する花の癒やし効果を科学的な療法としても普及させていきたい」と話す。

(京都総局 秋山原)

2017.12.7付 読売新聞朝刊特集面

近況

色あせないスターチスを象徴に 社会参加のいけばな街道実施

私どもは副賞を活用して「いけばな療法」の社会参加モデル「いけばな街道」を2018年に試験的に始めました。これは、認知症、不登校、ひきこもり、ひとり親、DV被害者といった社会とつながりにくくなりがちな人々のいけばな作品をまちづくりの場などで展示し、社会で役割を持つことにつなげるイベントです。枯れても色あせない花「スターチス」をやさしい社会を象徴する花として広げ、誰もがそれぞれに合ったスタイルで社会参加することの重要性を広める活動として、日本のみならず海外でも展開しています。この活動を通じ、花の生産地や種苗会社、関連企業、福祉、医療、教育といった分野の人々と協働し、「いけばな療法」のネットワークは拡大しました。受賞時に公言した「日本いけばな療法学会」も2019年に設立し、コロナ禍でのオンラインの普及もあって、「いけばな療法士」の養成は全国に広がっています。2022年には「いけばな療法の世界」=写真=を出版し、次は英語版での出版にも取り組み、世界に「いけばな療法」を広めて日本文化の社会的価値を伝え、人類の幸福に貢献できたらいいなと思います。(理事長 浜崎英子)



いけばな街道2022でスターチスの花空間のライブ映像を発信する浜崎さんら

視覚障害者の囲碁復活、普及

視覚障害者用の碁盤「アイゴ」を復活させた。アマ四段。2015年から目の不自由な子どもが通う各地の学校を巡り普及に携わる。

25歳の時、アニメ「ヒカルの碁」を機に囲碁を始めた。2年前に失明していたが「セリフを聞くだけで面白そうだった」。近くの教室に通い、言葉を介さなくても盤上でコミュニケーションができる魅力にはまった。



「アイゴ」で対局する柿島さん（右）

日本視覚障害者囲碁協会代表理事 柿島光晴さん 41（東京都町田市）

数年後に参加した関西の囲碁大会で、アイゴに出会った。盤面の線が立体的に盛り上がり、目が見えなくても盤面をイメージできる。碁石の裏に切れ目があり、碁石を盤面に固定できる。使い勝手の良さに驚いた。

一方で、在庫がほとんどないことを知った。金型も朽ち、新たに製造することもできなかった。金型作りに協力してくれる業者を探し回り、13年12月、アイゴの製造再開にこぎ着けた。日本点字図書館などに委託して販売している。

「囲碁は健常者と障害者が対等にできる数少ないゲーム」と語る。碁石海岸がある岩手県大船渡市で昨年からは全盲学校囲碁大会を開催し、今年は8校から13人が参加した。「出場校を増やすためにもアイゴを広めたい」と意欲は尽きない。

（立川支局・長内克彦）

2018.12.11付 読売新聞朝刊特集面

近況

オンラインで視覚障害者に普及「誰でも囲碁大会」も初開催

昨今の環境変化による様々なイベントの中止が続き、当団体の活動も変化を余儀なくされました。そこで、2020年4月に仲間たちと動画配信「みらくるTV」を設立し、オンラインによる視覚障害者への囲碁普及を開始しました。視覚障害者同士の対局では、打った場所を数字で教え合うため、言葉のやり取りだけで完結できるという大きな発見もありました。

また、21年4月、視覚障害者（弱視）で初めて日本棋院の院生になった岩崎晴都君がメディアでも紹介されたことをきっかけに、今までのアイゴを弱視向けに改良、コストも落としたアイゴツーを開発し、岩崎君のプロ棋士への道にも協力しています。22年8月、視覚障害、聴覚障害、高次脳機能障害、脳性まひなどの障害者と健常者が共に対局する「誰でも囲碁大会」を東京・市ヶ谷の日本棋院で初開催しました。

今後の目標は、以前のように全国の盲学校、視覚障害者協会へのアイゴ寄贈を再開させつつ、オンラインでの囲碁指導等、継続的な囲碁普及、そして障害の有無に関係なく、囲碁で繋がれる「誰でも囲碁大会」を2回、3回と続け、さらに囲碁を広めたいと考えています。

（日本視覚障害者囲碁協会代表理事 柿島光晴）



初めて開催された「誰でも囲碁大会」
（中央奥が柿島さん）

平均70歳の劇団 地域に活力



公演後には皆で後片付け。左端が佐藤さん

「高齢者が元気になって地域を活性化しよう」と、2011年7月に5人で劇団を旗揚げした。現在の団員は8人。いずれも60歳以上で平均年齢は70歳。創作劇で扱うテーマは、特殊詐欺や認知症、嫁姑問題など、高齢者に身近な問題を選ぶようにしている。

200人規模の小ホールのほか、「出前公演」と称して病院や高齢者福祉施設などで

くしろ高齢者劇団（北海道釧路市）

も上演する。入場無料で、公演回数は年間7、8回。公演が近づくと、団員は約3時間半の練習を週3回、精力的にこなす。

脚本を担当する事務局長の佐藤伸邦さん(77)は「無理なく楽しんでもらいたい」と上演が30分程度で終わるように工夫する。ほとんどの団員は演劇経験がないが、セリフを覚えて大きな声を出して役をこなし、「協力して演じることによりがいをを感じる。夢だった女優になれた」と喜ぶ団員もいる。釧路市での長期滞在中に参加した大阪市の女性性は「夏だけのつもりが、冬まで続けてしまった」と明かす。

（北海道支社・吉田尚司）

佐藤さんは「人口減少で活力を失いつつある地域で、新たな魅力を育む劇団であり続けたい」と意欲を燃やしている。

2018.12.11付 読売新聞朝刊特集面

近況

「高齢者のあこがれの的」 コロナ対策施し公演継続

新型コロナウイルスが流行し始めた2020年秋頃から地域の文化団体が活動を中止して静寂を保つ中、私どもは、地域活性化のため、また自分達のために、コロナ対策を万全にしながら活動を継続してきました。

「コロナで出かける機会が減った中、楽しい集まりの場を作ってくれました。元気が出ました。感謝しています。高齢者のあこがれの的。これからもガンバレ！」と、多くの皆さんから温かい激励の言葉をいただいております。副賞の100万円は、年に1度、釧路市内の小ホールを借りて行う定期公演（定員200人。午前・午後公演、入場料無料）の会場費や広報費、印刷費、通信費などに充当させていただいております。

団員の平均年齢も71歳になりました。最近、取り上げましたテーマは、免許証の返納を考える「オー！マイカー」（釧路警察署と共催）。高齢夫婦の望ましい関係を考える「夫婦雛～いかされて～」などです。23年度は、孫チャン世代と高齢者の交流を考える「孫は やさしい」の上演を考えております。これからは、若い仲間を誘って、次のステップへ向け、一歩前進していくことを目標にしております。

（事務局長 佐藤伸邦）



年老いた親との繋がりを考える「#ポッポ ハートポッポ」の公演（2022年3月）

らく
NPO法人楽の会リーラ

東京都豊島区



コミュニティーカフェでスタッフらと活動内容などについて話す市川さん

孤立しがちなひきこもりの本人やその家族を支援しようと、地域の公的支援機関や民生委員、ケアマネシヤーらと連携を目指す「地域家族会」の設立・運営を支援してきた。

80歳代の親が50歳代のひきこもりの子どもと暮らす「8050問題」も深刻化。自身もひきこもりだった長女を持つ事務局長の市川乙允さん(73)は「家族だけでは限界がある。SOSを出

ひきこもり 地域と支援

せる場所があるかどうかが重要」と話す。現在は都内で18家族会が活動し、2018年9月には各家族会が連携できる仕組みも作った。

活動は01年4月にひきこもりの親の会「楽の会」として始まった。ただ、家族会だけではきめ細かい支援が難しく、地域も巻き込んだ組織を発足。運営マニュアルを作成し、ひきこもり本人や家族らの居場所となるコミュニティーカフェもつくった。「怠けている」「親の育て方が悪い」といった偏見をなくすため、地域住民らへの説明会や事例検討会も開いてきた。

家族会は今年度中には25地域に広がる予定だ。市川さんは「地域の資源を動員し、様々な生き方に寛容で、互いに支え合える社会をつくりたい」と意気込んだ。(東京社会部・蛭川裕太)

2019.12.8付 読売新聞朝刊特集面

近況

電話相談やピアサポ養成に力点 家族会30に拡大 居場所事業も

読売福祉文化賞により、その後のコロナ禍を乗り切ることができつつあります。都内地域家族会連絡協議会参加の家族会も30家族会（準備会含む）まで拡大してきています。

コロナ禍で特に電話相談及びグループ相談会のピアサポーター養成に力を入れております。電話相談員を2人に増員し、更に養成することにより拡充を進めています。また、グループ相談会は専門のカウンセラーとピアサポーターとの連携により、複雑化するひきこもり家族の支援をより強化することにつながりますので、ピアサポート相談員養成講座を現在開講中です。

一方、ひきこもりからの回復過程で重要な居場所のカフェ葵鳥もボランティア（ピアサポーター含む）によって支えられております。5月28日には、テレビ朝日の番組「日本のチカラ」で「青い鳥のカフェ～ひきこもりからの一歩～」と題して放送され、全国から大きな反響をいただきました。今後、地域のひきこもりに対する偏見をなくして、多様な生き方に寛容な地域共生社会の実現に向けて、尽力していきたいと思っております。(理事長 市川乙允)



居場所になるカフェ葵鳥での話し合い



読売福祉文化賞20回記念誌

発行日 2023年3月
編集・発行 社会福祉法人
読売光と愛の事業団
〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
読売新聞東京本社内
Tel 03-3217-3473 Fax 03-3217-3474
<https://www.yomiuri-hikari.or.jp/>
Eメール：hikari-ai@yomiuri.com
印刷 株式会社 読売プリントメディア